

言語・文学委員会・哲学委員会・史学委員会・地域研究委員会合同
アジア研究・対アジア関係に関する分科会
(第25期・第5回)
議事要旨

日時：令和5年9月25日(月) 11:00~13:00

場所：オンライン開催

出席者：川島 真、栗田 禎子、下田 正弘、三重野 文晴、宇山 智彦、加藤
隆宏、君島 和彦、久保 亨、黒木 英充、國分 典子、小嶋 茂稔、
斎藤 明、坂井 俊樹、高見澤 磨、中野 聡、中村 元哉、芳賀 満、
水羽 信男、三ツ井 崇、村上 衛、桃木 至朗、吉澤 誠一郎

欠席者：君島 和彦

- 議 題
- (1) 前回議事要旨の確認
 - (2) CIPSH (International Council for Philosophy and Human Sciences / UNESCO の下で活動) の年次総会にて基調講演について
 - (3) 今後の意志の表出に向けて
 - (4) 東洋学・アジア研究連絡協議会主催のシンポジウムについて
 - (5) その他

冒頭、川島委員長より、定足数に達していることが確認され、分科会の開催が告げられた。

(1) 前回議事要旨の確認

前回開催された分科会の議事要旨案を確認し、了承した。

(2) CIPSH (International Council for Philosophy and Human Sciences / UNESCO の下で活動) の年次総会にて基調講演について

- ・ 下田委員から、CIPSH からの招聘によっておこなった基調講演について報告された。デジタル化における人文学の役割、Digital Humanities の見通しについて、仏教經典のデジタル化の例に講演し、ラテン語文献に依拠する欧州研究者からの強い関心が示されたことが、報告された。
- ・ 川島委員長から、同じ基調講演において、本分科会における2014年度、2017年度の「提言」の概要を、コロナウイルス感染症の経験をへた新たな時代のアジア研究の課題に関わる論点(デジタル資料へのアクセサビリティ、データの恣意性の問題、多言語能力の必要性の高まりなど)、について、日本の事例の紹介を交えて講演し、参加者から多くの共感を得たことが、報告された。

(3) 今後の意志の表出に向けて（次期への申し送り）

川島委員長から、次期における「意思の表出」にむけて分科会の2017年の「提言」を敷衍する形で議論を深めることが提案され、次期への申し送りとして、特に以下の論点について議論し、とりまとめられた。

- (1) 「日本—アジア間の関係」の深化+「世界の多様性」のいっそうの進行
- (2) 新たな可能性の模索（”グローバルサウス”への理解）
- (3) アジア諸国によるアジア研究：デジタル化・オンライン化の進行
- (4) アジア研究の環境の変化
- (5) 学术界の役割
- (6) 少子化のもたらす影響

(4) 東洋学・アジア研究連絡協議会主催のシンポジウムについて

斎藤委員から、12月2日に東京大学での実施予定のシンポジウム「東洋学・アジア研究の最前線—AIの活用と課題—」のプログラムについて説明され、日本学術会議の共催が提案された。日本学術会議（本分科会が主導）の後援を了承した。

(5) その他

期末における報告メモについて、川島委員長から説明された。